様式C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　５月２９日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８５３０７１７
研究課題名（和文）　ヨハネス・イッテンの芸術教育における総合性について

研究課題名（英文）　A Study on the Synthesis of Johannes Itten's Art Education

研究代表者　金子　宜正（KANEKO YOSHIMASA）
高知大学・教育研究部人文社会科学系・教授
研究者番号：２０２６３９６５

研究成果の概要：ヨハネス･イッテンの芸術教育に関する未公開資料(手書きの日記帳、書簡、授業作品等)の調査及びイッテンの教え子エヴァ･プラウトなど関係者への聞き取り調査等をふまえ、イッテン・シューレの体操や授業内容、イッテンが学生の才能を引き出すために教育上留意していた点等について具体的に明らかにするとともに、イッテン・シューレの授業課題相互のつながりを解明し、イッテン教育における総合性について考察した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	1,500,000	0	1,500,000
２００７年度	1,400,000	420,000	1,820,000
２００８年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	3,600,000	630,000	4,230,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教科教育学
キーワード：ヨハネス・イッテン、美術教育、バウハウス、イッテン・シューレ、エヴァ・プラウト、ボリス・クライント、竹久夢二、自由学園

１．研究開始当初の背景

ヨハネス・イッテンは、ドイツのヴァイマールに開校されたバウハウスに「予備課程」を創設し、独創的な芸術の基礎教育を行なったことで世界的に知られている。イッテンの芸術教育は、コントラストを主軸に明暗・点・線・面・フォルム・空間・材料・色彩等を学生たちに把握させ、学生各自の個性や才能を引き出すものであった。我が国においても、彼の著書『色彩論』や『造形芸術の基礎』等の翻訳書を通じてイッテンの芸術教育の一端は知られている。しかし、これらはイッテンが晩年に纏めたものであることから、やや包括的な内容になっており、イッテンが実際の授業で行なっていた教育方法の特徴等、イッテン教育の真の姿は十分認識されるには至っていない。海外では、オリジナル資料に基づいた研究が進んできているが、未公開資料が多いこともあり、イッテンに関しては研究途上の段階である。国内では、以前からイッテン教育への関心は高いが、オリジナル資料に基づいた研究は僅かであった。

私はかつて、竹久夢二が著した授業用テキストをもとに、夢二がベルリンのイッテン･

シューレで行なった日本画の授業内容について論文に纏めた（金子宜正「イッテン・シューレにおける日本画の授業について」1993年）。

その翌年、1994年に私はスイスのイッテン夫人宅を訪ね、夫人が所蔵していた夢二の墨絵作品等の資料を調査する機会を得た。当時、欧州では、イッテンと竹久夢二や水越松南とのかかわりについては不明な点が多かった。そこで、私は、欧州と日本の双方で関連資料の調査や関係者への聞き取り調査を行なった。その後、イッテン・シューレにおける日本人画家（竹久夢二・水越松南）の墨絵の授業内容の詳細やイッテン教育とのかかわりについて、数本の論文に分けて明らかにすることができた。

また、イッテン･シューレに留学した自由学園の山室光子・笹川和子への聞き取り調査及び当時の資料や授業作品等をふまえ、イッテンから二人が学んだ内容を明らかにするとともに、二人の帰国後にイッテンの教育方法が自由学園の美術教育に取り入れられた様子を具体的に明らかにした。そして、我が国の構成教育の礎を担った『構成教育大系』とイッテン教育とのかかわり、イッテン教育の日本への受容過程等について解明した（金子宜正「イッテン･シューレにおける造形教育の我が国への受容過程に関する一考察―山室光子・笹川和子両氏の業績をふまえて―」1995年）。

更に、イッテン･シューレの教育カリキュラムについて、当時の学校案内等の資料をもとに明らかにするとともに、イッテン･シューレから出版されたイッテンの造形芸術教育書『イッテン日記―造形芸術の対位法への寄与―』について、内容の構成、「明暗」の授業展開、「点」、「線」、「四角・丸・三角」に関する記述等について取り上げ、イッテンの分析的研究の一端を論文に纏めた。私がイッテン・シューレの研究を始めた当初、日本ではイッテン･シューレはほとんど知られておらず、海外でもあまり研究が進んでいなかった。しかし、前述のような一連の研究を通して、私はイッテン･シューレがどのような学校であったのか、イッテンと日本人との交流がどのように行なわれたのかについて明らかにしてきた(イッテン・シューレに関する筆者の論文は、すべて列記すると煩雑となるため、本稿の本文中における論文題目の記述は一部に留めた)。

このような経緯の中、イッテンと日本人との交流に関する研究内容は「日本の前衛 Art into Life 1900-1940」展（京都国立近代美術館、水戸芸術館現代美術センター、Bauhaus Museum Berlin, 1999－2000年)や「Johannes Itten Wege zur Kunst(ヨハネス・イッテン造形芸術への道)」展（Saarland Museum Saarbrucken, Kunstmuseum Bern, 宇都宮美術館、京都国立近代美術館、東京国立近代美術館 2002－2004 年)、「水越松南」展（姫路市立美術館）等、国内外の展覧会でも取り上げられた。また、宇都宮美術館で開催された展覧会関連企画において、私は、「イッテン･シューレに学んだ自由学園からの留学生」について、1995年の論文発表以降に判明した新知見を含め、改めて研究発表を行なった。近年欧州及び日本で開催された大規模な展覧会では、イッテンの教育が再評価され、イッテン教育への関心は高まってきている。欧州でも、私が研究してきたイッテンと日本人との交流に興味を持つ人が増え、2005年12月、ドイツのハム市(Stadt Hamm:Gustav Lubcke Museum)で行なわれたバウハウス関連の国際会議に、主催者側（ザールラント大学美術史研究所及びグスタフ・リュプケ美術館）から招聘され、イッテンと日本人及び禅の考え方にかかわる研究発表を行なった。

このように、本研究を行なう上での研究上の背景としては、イッテンと日本人とのかかわりを中心に、ベルリン時代のイッテンの教育の様子が徐々に明らかとなり、イッテンの教育の再評価が行なわれつつあった段階であったと言える。

２．研究の目的

ヨハネス・イッテンの芸術教育では、「明暗」、「点・線・面」、「フォルム」、「材質感」、「色彩」、「名画分析」等の実践的な授業課題を行なうとともに、学生の個性や才能を引き出すことを重視していた。イッテンは、知性・身体・精神のバランスを図り、芸術を通して全人的な教育を行なうことを目指していたのである。実際の授業において、イッテンは、どのような点に留意し、どのような方法で授業を展開していたのであろうか。

前述のように、欧州と日本でイッテン教育が再評価されつつある中で、これまで私がおこなってきたイッテンと日本とのかかわりに関する研究をふまえ、イッテンが実際の授業で行なった教育方法について、より詳しい分析を進めることが必要と考えた。イッテンの芸術教育における理論的な背景とともに、実際の授業における教育方法や教育上重視している点などについても詳しく解明し、イッテンの芸術教育全体について考察を深めていくこととした。

本研究では、これまでの研究調査をふまえ、イッテンに関わる未公開資料（手書きの日記帳、書簡、授業作品等）及び新たに所在が判明した資料の調査を併行して行なうとともに、イッテンの教え子や関係者への聞き取り調査を更に進めることとした。これらを通して、イッテンの芸術教育における考え方や実際の授業にみられる教育方法の特色につい

て明らかにし、イッテンの芸術教育にみられる総合性について具体的な内容をふまえて考察を深めることを目的とした。

３．研究の方法

イッテンの芸術教育活動は、主としてウィーン時代、ヴァイマールのバウハウス時代、ベルリンのイッテン・シューレ時代、クレーフェルトの織物学校時代、晩年に至るまでのチューリッヒ時代と大別できる。イッテン・シューレは、イッテンが自ら設立した芸術学校である。新校舎の竣工、造形芸術教育書『イッテン日記―造形芸術の対位法への寄与―』の出版など、イッテン・シューレ時代は、イッテンが非常に活発な芸術教育活動を展開した時期であり、日本人とイッテンが直接交流した時期でもある。1932 年以降、イッテンはベルリンとクレーフェルトの双方で教鞭を執っていた。これまでの研究成果をふまえ、本研究では、ベルリンのイッテン・シューレ時代及びそれに続くクレーフェルト時代に関わる未公開資料の調査に重点を置きながら、研究を進めることとした。ベルリンとクレーフェルトにおける教育内容について併行して研究を進めることは、同時期になされたイッテンの芸術教育の特質を浮かび上がらせる上で重要と考えたためである。前述のように、本研究では、イッテンの芸術教育に関わる未公開資料の調査及び関係者への聞き取り調査を更に進め、イッテン・シューレの学生達によるイッテン教育についての証言や授業作品、イッテンの手書き資料等について詳しく分析することとした。これらを通して、イッテンの教育方法の特色や教育上重視していた考え方等について明らかにし、イッテンの芸術教育についての考察を深めた。

また、欧州における調査の際は、これまでと同様に、現地の研究機関等の研究者と最新の研究動向について意見を交わした。更に、関連する国内及び国際学会の大会に参加し、研究交流を行なうとともに、研究成果を論文に纏め、発表した。

４．研究成果

これまでの私の研究で得られた成果をふまえ、本研究課題「ヨハネス・イッテンの芸術教育における総合性について」について、欧州及び国内において、イッテンの芸術教育に関わる未公開資料調査及び関係者への聞き取り調査を行なった。主な研究成果は以下の通りである。

私は、ヨハネス・イッテンの教え子の一人であるエヴァ・プラウトと直接会見し、イッテンの芸術教育についての聞き取り調査を行なうことができた。今回の調査で新たに発見したクレーフェルトの学生の授業作品等の新資料及びイッテンの手書き資料等の分析を行なうとともに、以前に私が行なった山室・笹川への聞き取り調査の内容とプラウトの発言を比較し、イッテンの芸術教育の具体的な内容や方法について考察した。私が聞き取り調査を行なった際、プラウトは、イッテン・シューレで行なわれていた朝の体操を実演してくれた。イッテンが制作前の学生たちに体操を行なわせていたことはよく知られているが、具体的な体操の仕方については、これまで不明な点が多かった。本研究を通して、イッテン・シューレにおける朝の体操の具体的な動きや精神集中を目的とした内容等について明らかにすることができた。また、プラウトは、イッテンの造形芸術教育書『イッテン日記』を前に、イッテンの芸術教育について語ってくれた。『イッテン日記』には、学生が授業で実践した内容とイッテンが授業で講義した内容が分けて記されていることが、プラウトの言により判明した。また、基礎は徹底的に身につけるように、しかし、応用段階で画面を構成する場合は、他の人と異なる自分独自のものを制作するようにイッテンが指導していたことなど、具体的な授業の様子を明らかにすることができた。更に、イッテンの教育では、領域を超えて同じ手法が用いられていたことや、鑑賞と表現が表裏一体であったことを解明した。また、プラウトと日本とのかかわり、プラウトがイッテン・シューレ在学中に竹久夢二の授業で描いた墨絵作品、プラウトの教育活動等について明らかにした。更に、プラウトの証言をふまえ、『イッテン日記』の内容を分析するとともに、人間の直観や感情、個性と色とのかかわりなど、イッテンの芸術教育における人間を中心とした視点について論じた。以上の内容については、次の論文に詳しい。

〔金子宜正「ヨハネス・イッテンの芸術教育における人間を中心とする考え方について―『イッテン日記』の内容分析とエヴァ・プラウトとの談話をふまえて―」美術科教育学会誌『美術教育学』第 28 号 2007 年 143－155 頁所収〕

また、本研究課題における調査では、イッテン・シューレの学生に関わる新資料や授業作品等の資料について、新たに調査を進めることができた。これらをふまえ、イッテン・シューレに同時期に在籍していた学生たちについて明らかにするとともに、イッテン・シューレの学生たちの証言や授業作品、イッテンの授業課題について検討した。イッテンの自然研究に関する著述内容について考察するとともに、「野菜」や「花」を題材とした授業作品や学生の証言及び竹久夢二の授業で描かれた学生たちの墨絵作品等について詳しく分析した。そして、イッテンがコントラストを総合的に扱う課題として「野菜」等を取り上げていたことを明らかにすると

ともに、イッテンの自然研究の特徴について論じた。更に、イッテン・シューレにおける授業課題がコントラストを主軸に、互いにつながりをもちながら展開していたことを解明した。これらの内容については、次の論文に詳しい。

〔金子宜正「イッテン・シューレの美術教育における授業課題の連関について―イッテン・シューレの学生たちの証言や作品をふまえて―」『大学美術教育学会誌』第 40 号 2008 年 105－112 頁所収〕

更に、1930 年代のベルリンにおけるイッテン・シューレ及びバウハウスの関係者の動向とその後の活動について取り上げるとともに、イッテン･シューレの学生であったボリス･クライントとエヴァ・カイザーとの繋がりや、カイザーが結婚したハネス・ノイナー(かつてバウハウスの学生)とクライントの教育上の接点等について論じた。また、クライントの芸術教育には、日本の墨絵等の影響を含め、イッテンが教育上重視していた内容が継承されていること等について論じた。

近年、ドイツの研究機関や研究者からの依頼を受けて、二本の論文を寄稿した。これらはドイツの書籍に掲載され、出版された。それは以下の通りである。

〔Yoshimasa Kaneko, Johannes Itten and Zen in: Esoterik am Bauhaus. Eine Revision der Moderne? Hrsg. Christoph Wagner, Verlag Schnell & Steiner GmbH Regensburg 2009年 150-172頁所収〕

〔Yoshimasa Kaneko, Anmerkungen zur japanischen Ausgabe der “Bildlehre” von Boris Kleint in:Boris Kleint. Malerei Glasbilder Plastische Bilder Stelen Kunst im offentlichen Raum 1933-1992, Hrsg.Jo Enzweiler, Kruger Druck + Verlag GmbH Dillingen2009年202-203頁所収〕

前者では、ベルリンでイッテンと日本人画家を結びつけた長井亜歴山の活躍、南画家・水越松南とイッテンとのかかわり、竹久夢二の日本画テキストの内容と禅思想とのつながり、竹久夢二がイッテン･シューレで行なった墨絵授業とイッテン･シューレの学生による墨絵作品、イッテンの禅思想及び墨絵への探究等について、今回の研究課題における調査で得られた新資料などを総合的に扱い、イッテンと禅について論じた。後者では、イッテンの教え子、ボリス・クライントに関する論考を纏めた。クライントと自由学園の山室光子・笹川和子が同時期にイッテン･シューレに在籍していたことを明らかにするとともに、クライントがイッテン・シューレに在籍していた期間は、イッテンが日本画(墨絵教授)を芸術教育の一環として取り入れていた時期であることを指摘し、クライントの芸術教育に継承されているイッテン教育と日本との接点を中心に論じた。

先に述べた「ヨハネス･イッテンの芸術教育における人間を中心とする考え方について―『イッテン日記』の内容分析とエヴァ・プラウトとの談話をふまえて―」は、2007（平成 19）年度　美術科教育学会『美術教育学』賞を受賞した。

また、第 32 回 InSEA 国際美術教育会議においては、欧州の美術館関係者やバウハウスの教育に関心がある研究者が私の発表を聞きに来てくれた。発表後もバウハウス教育という共通の接点から、研究上の交流を活発に行なうことができた。欧州の研究者からは、ベルリンのバウハウス・アルヒーフ（バウハウス資料館）の研究者や、バウハウス研究で著名なライナー・ヴィックの研究などが提示され、世界的な研究動向について、意見を交わした。

前述のドイツで出版された書籍には、国際的なバウハウス研究者たちの論文と並んで私の寄稿論文を掲載して戴き、また、文献リストに紹介されるなど、大変有り難く感じている。

前述したように、本研究を通して、イッテンの芸術教育では、表現と鑑賞が表裏一体であったことや、領域を超えて同じ手法が活かされていたこと、コントラストを主軸に、授業課題が互いにつながりを持ちながら展開していたこと等を明らかにした。更に、人間を中心とした、イッテン教育の特徴について解明することができた。これらの授業課題における相互連関は、イッテン教育における総合性の一端を示すものであり、その柔軟性が学生の感覚や個性を引き出す原動力となったと考えられる。

かつて私は、コントラストや対比・対極の概念がイッテンをはじめとするバウハウス教育において重視されていたことを指摘した。そして、コントラストの考え方を活かした美術や工芸の授業課題が我が国の高等学校をはじめとする普通教育に効果的であることを実践的に明らかにしてきた経緯がある。本研究の成果により、今後の我が国における美術教育を考える上で、一層具体的で有益な指針を得ることができたと考える。更に研究を進め、イッテン及びバウハウスの芸術教育における理論及び実践の特質を解明するとともに、我が国の美術教育に一層活用する方向性を導き出したいと考えている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

1.<u>金子宜正</u>、「ヨハネス・イッテンの芸術教育における人間を中心とする考え方につい

て―『イッテン日記』の内容分析とエヴァ・プラウトとの談話をふまえて―」、美術科教育学会誌『美術教育学』第 28 号、143－155 頁、2007 年、査読有

2.金子宜正、「イッテン・シューレの美術教育における授業課題の連関について―イッテン・シューレの学生たちの証言や作品をふまえて―」、『大学美術教育学会誌』第 40 号、105－112 頁、2008 年、査読有

3.Yoshimasa KANEKO, Academic Front of Japanese Bauhaus-Research and Bauhaus-Pedagogy ― for the International Mutual Communication between Japan and Germany with Respect to Activities by >Second Generation of Bauhaus people< after 1945 ―,The 32nd InSEA World Congress 2008 in Osaka Japan, CD-ROM 出版頁記載無、全 10 頁、2008 年

〔学会発表〕（計１件）
1.Yoshimasa KANEKO, Academic Front of Japanese Bauhaus-Research and Bauhaus-Pedagogy ― for the International Mutual Communication between Japan and Germany with Respect to Activities by >Second Generation of Bauhaus people< after 1945 ―,The 32nd InSEA World Congress 2008 in Osaka Japan（第 32 回 InSEA 国際美術教育会議 2008 大阪日本）、2008 年 8 月 6 日、大阪国際交流センター

〔図書〕（計３件）
1.金子宜正、「ザールブリュッケン国立美術工芸学校（現：ザール造形芸術大学）における戦後芸術大学改革とバウハウス教育学の貢献―《主観的写真(subjektive fotografie)》、《ノイエ・グルッペ・ザール(neue gruppe saar)》、《ドクメンタ(documenta)》等の動向をふまえて―」、『バウハウスと戦後ドイツ芸術大学改革』（編著：鈴木幹雄・長谷川哲哉）、風間書房、2009 年、77－105 頁(総ページ数：321 頁)

2.Yoshimasa Kaneko, Johannes Itten and Zen, in: Esoterik am Bauhaus Eine Revision der Moderne?, Hrsg. Christoph Wagner, Verlag Schnell & Steiner GmbH Regensburg(ドイツ), 2009 年, 150-172 頁(総ページ数：279 頁)

3.Yoshimasa Kaneko, Anmerkungen zur japanischen Ausgabe der “ Bildlehre ” von Boris Kleint, in:Boris Kleint. Malerei Glasbilder Plastische Bilder Stelen Kunst im offentlichen Raum 1933-1992, Hrsg.Jo Enzweiler, Kruger Druck + Verlag GmbH Dillingen(ドイツ), 2009 年, 202-203 頁(総ページ数：216 頁)

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）
○取得状況（計 0 件）

〔その他〕
金子宜正
2007(平成 19)年度『美術教育学』賞（美術科教育学会）受賞（2008 年 3 月）。
受賞論文「ヨハネス・イッテンの芸術教育における人間を中心とする考え方について―『イッテン日記』の内容分析とエヴァ・プラウトとの談話をふまえて―」美術科教育学会誌『美術教育学』第 28 号、143－155 頁、2007 年

６．研究組織
(1)研究代表者
金子　宜正（KANEKO　YOSHIMASA）
高知大学・教育研究部　人文社会科学系・教授
研究者番号：２０２６３９６５

(2)研究分担者
無し

(3)連携研究者
無し